

2012年 9月4日・京都新聞「文化」欄では

脱原発 切実な思いを詩に

国内外の218人 アンソロジー出版

原発問題や今後の世界のあり方をテーマに、国内外の詩人の作品を集めたアンソロジー「脱原発・自然エネルギー218人詩集」(コールサック社)が出版された。福島第1原発事故によってもたらされた悲劇を真摯に見つめ、自然エネルギーへの転換を切実に訴える230篇を収録している。

東日本大震災前に書かれた20篇からなる第1章「予知されていた悲劇」に始まり、「メルトダウンを見つめて」「被曝した子供たちの未来」「脱原発の神話を」など全11章で構成される。第2章以降は震災後に国内外から寄せられた作品で、218人のうち24人が米国などの外国人だ。

第1章に収録された福島県南相馬市の若松丈太郎さんの連詩「かなしみの土地 6 神隠しされた街」は、1994年に発表された。チェルノブイリ事故で避難を余儀なくされ、無人になったウクライナの町を訪れて、福島で同様のことが起こったら—と予想する内容だが、それが現実になった今、詩の言葉は鋭く胸に迫る。

〈私たちの神隠しはきょうかもしれない／うしろで子どもの声がした気がする／ふりむいてもだれもいない／なにかが背筋をぞくっと襲う／広場にひとり立ちつくす〉

自責の念、恐怖、怒り、悲しみ…。詩の一つ一つから、原発に対するさまざまな思いが浮かぶ。京滋から参加した10人のうち、京都市の片桐ユズルさんは4行詩「地震のあとで 津波のように」を寄せた。

〈認識は遅れて やって来る／祭りの あとに／さしこむ いざよいの月／見はるかす 記憶の散乱〉

また、ドイツのイングリット・H・ドレーヴィングさんは「妄想」の冒頭で指摘する。

〈安全で有効な原子力という妄想は／今でもなおはびこっている、／これがとんでもない代物だということは／私たちにはもうはっきり見えているのに。〉

版元のコールサック社代表で詩人の鈴木比佐雄さん(58)は、2007年からほぼ毎年、全国の詩人によるアンソロジーを刊行してきた。「原爆」「大空襲」「鎮魂」「命が危ない」をテーマにしてきたが、原発に危機意識を持つ詩人の多さを痛感し、今回の出版を決めたという。

「詩には、魂や精神の奥底に届く本質的な言葉で、人間を再生させる力がある。脱原発とともに、福島の悲劇から立ち上がる思いを、詩を通して世界に発信したい」と話す。全作品の英訳付き。

と紹介されています。